

英語二重目的語構文における事象構造

著者	"濱崎 孔一郎"
雑誌名	"鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編 =Bulletin of the Faculty of Education, Kagoshima University. Cultural and social science"
巻	55
ページ	119-132
別言語のタイトル	The Event Structure of the Double Object Construction in English
URL	http://hdl.handle.net/10232/1117

英語二重目的語構文における事象構造

濱 崎 孔一郎

(2003年10月21日 受理)

The Event Structure of the Double Object Construction in English

HAMASAKI Ko-ichiro

1. はじめに

二重目的語構文 (double object construction) と与格構文 (dative construction) は、同じ項構造 (argument structure) を持ち、似たような意味でありながら、異なる構文として現代英語において共存している。しかし、両者には明白な違いが存在する。次の例を見てほしい。

- (1) a. Mary taught Bill French.
 b. Mary taught French to Bill.
- (2) a. Mary showed her mother the photograph.
 b. Mary showed the photograph to her mother (but her nearsighted mother couldn't see it).

(Goldberg (1995 : 33))

(1 a) の二重目的語構文の場合には Bill が実際にフランス語を習得したという含意があるのに対して、(1 b) の与格構文にはそのような含意は必ずしもない。同様に、(2 a) では母親が実際に写真を見たことが含意されるが、(2 b) には、カッコ内の表現を補うことが可能であることから分かるように、そのような含意はない。(cf. Traugott (1988), Sweetser (1990), Lakoff and Johnson (1980 : 130))

いったい何故このような違いが生じるのであろうか。そこで、本稿では事象構造 (event structure) の観点からこのふたつの構文の違いを明らかにし、特に二重目的語構文の特異性が何に起因するかを解明することを目的とする。

なお、本論は以下のように構成される。第2節では、Goldberg (1995) の構文文法や Langacker (1990, 1991a, 1991b) の認知文法の分析に基づき、二重目的語構文の意味的特異性を明らかにし、さらにこれらの分析の問題点を指摘する。次に第3節で、行為連鎖という概念を二重目的語構文に応用し、その特異性を事象構造の観点から説明することを試みる。第4節は、二重目的語構文

が二つの事象構造をもつことの証拠を提示し、そこから導き出される統語構造について考察する。第5節が議論全体のまとめである。

2. 二重目的語構文の意味的特徴

2.1 構文文法による分析

Goldberg (1995) の提唱する構文文法 (Construction Grammar) は、文の中にはその文を構成する個々の語彙項目からだけでは予測できない意味が生じるということを指摘し、そのような意味は構文のもつ意味であると主張する。二重目的語構文もその一つの例として挙げられている。

その一つ目の根拠は、文の述語の項構造からは予測できないような意味が構文に生じてくるということである。具体的に③の例文で考えてみよう。

③ Sally baked her sister a cake.

(Goldberg (1995 : 141))

例文③には「意図された移動」(intended transfer) という意味が関わってくるが、動詞 *bake* にそのような意味はない。項を二つとる通常の他動詞構文の場合、述語動詞 *bake* は、動作主 (agent) と被動作主 (patient) という二つの意味役割をもつ項しか要求しない。この動詞が二重目的語構文で使われたときにのみこういう意味が生じてくる。したがって、この意味は、動詞そのものの語彙特性に起因するものではなく、構文によるものと主張されている。

二つ目の根拠は、与格構文には課されず、対応する二重目的語構文にのみ課される意味制約が存在することである。次の二つの例を比較してみよう。

(4) a. I sent a package to the boarder/the border.

b. I sent the boarder/*the border a package.

(Gropen et al. (1989 : 207))

例文 (4 b) に示すように、二重目的語構文の着点項 (goal argument) は有生 (animate) でなければならないという意味制約が存在する。しかし対応する与格構文の場合、例文 (4 a) から明らかかなように、このような制限は課されない。意味的にほぼ同じような内容を表す構文であるにもかかわらずこのような違いがあるのは、二重目的語構文の独自性を示すものである。つまり、この場合も構文そのものからこのような意味が生じてくると Goldberg は主張しているのである。

確かに、以上のような根拠をみると、二重目的語構文の構成素である述語とは独立して、構文そのものに意味があるように思われる。しかし、そのような意味はどこから生じるのであろうか。そこで Goldberg はさらに論を進めて次のような指摘をしている。すなわち、二重目的語構文が構文そのものとして独自の意味をもつということは、他の語彙項目と同じように、中核的な意味とそれから派生した意味をもつということが予想される。実際に、二重目的語構文のもつ意味は、(5)に示

すような中核的な意味と (6-10) に示すようなさまざまな派生的意味がネットワークを構成していると Goldberg は主張している。(a) がそれぞれの意味 (sense) で、(b) や (c) はそれぞれの意味の場合に用いられる動詞の例である。

- (5) a. Central Sense: Agent successfully causes recipient to receive patient
 - b. Verbs that inherently signify acts of giving: *give, pass, hand, serve, feed,...*
- (6) a. Conditions of Satisfaction imply that agent causes recipient to receive patient
 - b. Verbs of giving with associated satisfaction conditions: *guarantee, promise, owe,...*
- (7) a. Agent causes recipient not to receive patient
 - b. Verbs of refusal: *refuse, deny*
- (8) a. Agent acts to cause recipient to receive patient at some future point in time
 - b. Verbs of future transfer: *leave, bequeath, allocate, reserve, grant,...*
- (9) a. Agent enables recipient to receive patient
 - b. Verbs of permission: *permit, allow*
- (10) a. Agent intends to cause recipient to receive patient
 - b. Verbs involved in scenes of creation: *bake, make, build, cook, sew,...*
 - c. Verbs of obtaining: *get, grab, win, earn,...*

ここで注意すべきは、上に示された(5)の中核的な意味も(6-10)のさまざまな派生的意味についても、いずれもその定義が二つの節からなるということである。すなわち、主節と不定詞節、あるいは *that* 節である。したがって、これらの定義が正しいとすると、二重目的語構文の意味はふたつの事象から成り立つということがいえよう。実際に、本論では二重目的語構文はふたつの事象からなるということを主張していく。Goldberg によると、二重目的語構文にはさまざまな意味制約が存在するという指摘がなされており、それらの意味制約は、二重目的語構文そのものに固有の意味のネットワーク、すなわち中核的な意味とこれから派生したさまざまな副次的な意味から導き出されると主張されている。そこで、次に、Goldberg の挙げる意味制約を検討していくことにする。

2.2 二重目的語構文にみられる意味制約

本節では、二重目的語構文にみられる意味制約を見ていくことにより、この構文のもつ特徴を考えていきたい。第1の意味制約は、たとえば(11)の例が示すように、主語の項には直接目的語が指すものを伝達しようという意志がなければならない、というものである。したがって、例文(12)が示すように、その意志がなくて結果的に渡すことになったというような例は非文になる。

- (11) a. Joe painted Sally a picture.
 - b. Bob told Joe a story.
- (12) a. *Joe threw the right fielder the ball he had intended the first baseman to catch.
 - b. *Hal brought his mother a cake since he didn't eat it on the way home.

c. *Joe took Sam a package by leaving it in his trunk where Sam later found it.

(Goldberg (1995 : 143))

ものの伝達を引き起こすのは、主語名詞句の項であり、当然そこには伝達の意志があるというのは自然な考えであろう。

第2の意味制約は、第1目的語は受益者 (beneficiary) であるか、あるいは自らの意志で受け取るということが挙げられている。次の例を見てよう。

(13) *Sally burned Joe some rice.

(14) a. *Bill told Mary a story, but she wasn't listening.

b. *Bill threw the coma victim a blanket.

(Goldberg (1995 : 146))

(13)の例では間接目的語の指示する人物は利益を得ることには通常ならないから非文となる。例文(14)では、いずれも自らの意志で受け取っていないので不適切である。これらも、基本的意味として実際にももの移動がうまくいくという意味があるからという。

ここで、(14b) に対応する与格構文 (14c) を考えてみてほしい。

(14) c. Bill threw a blanket to the coma victim.

例文 (14c) は、(14b) の例文とほぼ同じような意味を持ち、同一の項から成り立っているにも関わらず、適格となる。二重目的語構文の中核的意味がたとえどのようなものであろうと、(14b) と (14c) の間に出てくる文法性の違いはどこから生じるのであろうか。Goldberg によると、それは二重目的語構文という構文そのもののもつ意味から生じるということになるはずであるが、(5 a) から (10a) に挙げられた二重目的語構文の意味はいずれも動作主の行う行為によって表された事象であり、動作主の意志が反映されるのは分かるとしても、受益者である第1目的語の指示対象が自らの意志で受け取るという意味制約がどこから生じたかは不明である。もし主語の動作主の意志だけでなく、受益者の意志も関与しているとすれば、二重目的語構文で示されている事象は一つではなく二つということになる。

第3の意味制約は、間接目的語が受容者 (recipient) でなければならないというものである。所有者 (possessor) や着点 (goal) と考えられるかもしれないが、次のような例から受容者の方が適切であると Goldberg は主張している。

(15) a. Joe gave Mary an insult.

b. Jan gave Chris a punch.

(Goldberg (1995 : 146))

(15)の例では、いずれも間接目的語の人物が侮辱とかパンチを受ける、あるいは受容するということを含意すると述べられている。しかし、例文(1), (2)ですで見たとおり、二重目的語構文には、対応する与格構文とは違って、間接目的語の項が直接目的語の指示対象を受け取るという含みがあり、Goldberg 自身が指摘しているように、意味は中核的な意味からさまざまに拡張される。そして、

その拡張の仕方には比喩も含まれる。とすれば、(15)の例が中核的な意味から離れた周辺の意味であると考え、とくに受容者という意味役割にこだわる必要はないかもしれない。ただ、ここで指摘しておきたいのは、間接目的語の項がもつ意味役割が所有者であろうと受容者であろうと、いずれも間接目的語と直接目的語の間に主動詞で表された事象とは異なる事象が観察されるという点である。¹⁾

以上、Goldberg (1995) の構文文法の枠組みによる二重目的語構文の特徴を主にその意味的な観点から検討してきた。この研究により、次の二つのことが明らかにされた。すなわち、第1に、二重目的語構文は、対応する与格構文とは異なる独自の意味をもつ。第2に、二重目的語構文のもつ独自の意味は、述語動詞からは得られず、構文そのものに起因する。ただし、二重目的語構文のもつ独自の意味は構文そのものに起因するとはいうものの、その構文が一体どのような構造を成しているのか明らかにしていないし、さらに、与格構文との相違も明白ではない。しかしながら、Goldberg の研究から二重目的語構文は主動詞の述語で表されている事象以外に、もうひとつの事象が関わっている可能性が明らかになってきた。そこで、この可能性をさらに別の視点から突き詰めていくことにする。

2.3 認知文法による分析

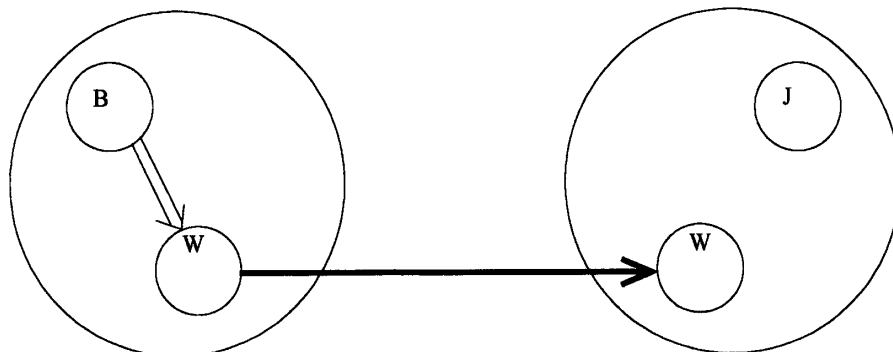
Goldberg (1995) よりも二重目的語構文のもつ意味を明確に示していると思われるのは Langacker (1990, 1991a, 1991b) の認知文法 (Cognitive Grammar) の枠組みである。特に、Langacker (1990, 1991b) の分析では、与格構文と二重目的語構文との違いが明白にされている。Langacker は、(16)の例を使って、一見似たような意味をもつと思われる2つの構文にも、認知上明確な違いがあることを(17)の図を使って説明している。

- (16) a. Bill sent a walrus to Joyce.
b. Bill sent Joyce a walrus.

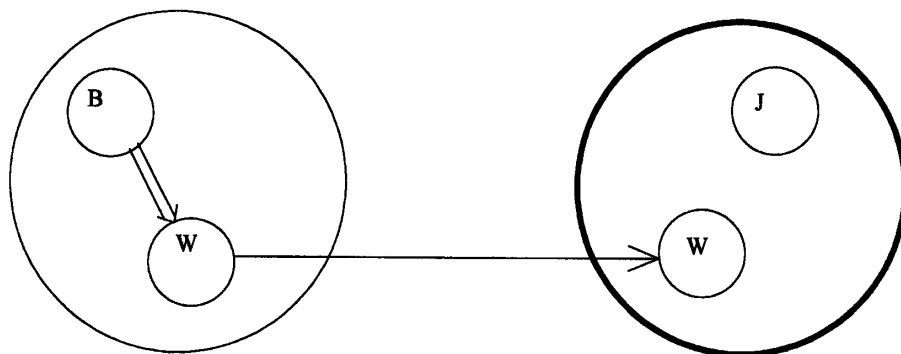
(Langacker (1990 : 13 ; 1991b : 276))

(16a, b) はそれぞれ (17a, b) に対応している。

(17) a.



b



(Langacker (1991b : 277))

小さな円で囲まれた B, J, W はそれぞれ Bill, Joyce, walrus を表している。大きな円は Bill と Joyce の支配権の及ぶ範囲を示す。二重矢印は間接目的語項の移動を引き起こす主語項の働きかけを示し、1 本線の矢印は間接目的語項の移動を表している。太線で示されている部分は、他の部分よりも際だっている、あるいは、より専門的な言い方をすると、顕現化 (profiled) されている、と話し手が認知している部分を表している。

例文 (16a) と (16b) のまず目につく違いは、前者には前置詞 to が現れているのに対して、後者にはこれがないという点である。これは、to のもつ方向性、移動が顕現化されていることを示す。²⁾

もう一つの違いは、(17b) に示すように (16b) では、Joyce の walrus に対する支配権・所有関係が顕現化されているということである。Joyce と a walrus というふたつの名詞句が並置されることによって所有関係が示されている。³⁾もしこの主張が正しいとすれば、二重目的語構文において文末焦点があたっているのは、直接目的語ではなく、間接目的語と直接目的語という二つの目的語全体ということになろう。このことは、この二つの目的語が一つの構成素を成している可能性を示唆している。したがって、Langacker の分析においても、二重目的語構文は、一見したところ単一節であるように見えるが、実はそこで表されているのは単一の事象ではなく、二つの事象だということがいえる。

Goldberg (1995) より Langacker の説明の方が優れているのは、二重目的語構文の特殊な意味が構造上どの部分に起因するかをより特定している点にある。すなわち、間接目的語と直接目的語の並置によって両者に所有関係があることが示されている。

Goldberg (1995) は、二重目的語構文の中核的意味を「実際の移動の達成」としているが、それだけでは二重目的語構文によく出てくる次のような例を説明するには不十分である。

- (8) a. Chris baked Pat a cake.
b. Chris baked a cake for Pat.

(Goldberg (1995 : 34))

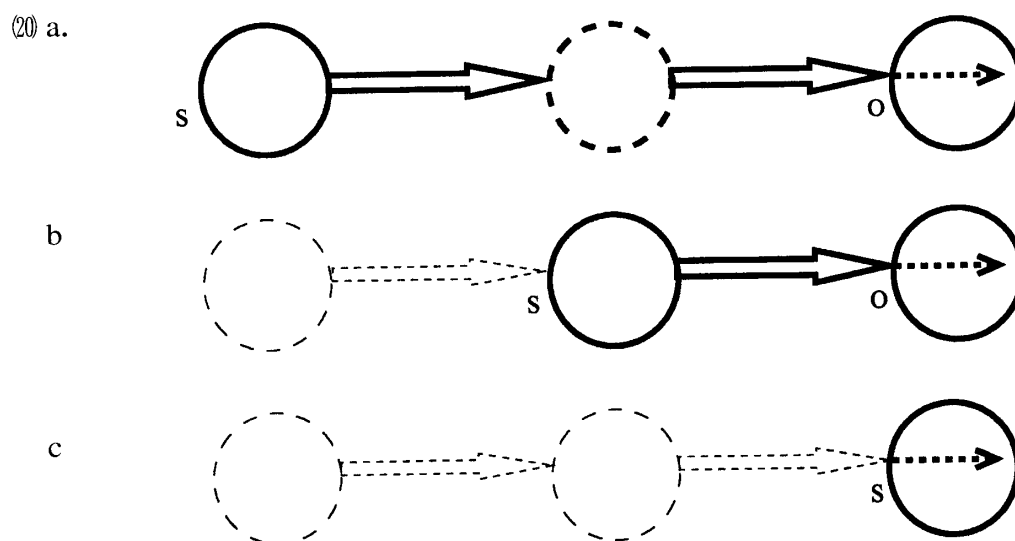
(18a) の二重目的語構文は、Pat のもとにケーキが移動したという含みはない。それは、対応する (18b) の与格構文において、経路を含まず着点だけを示す前置詞 for が用いられていて、経路を含意する前置詞 to が使われていないことから明らかである。⁴¹しかし、例文 (18a) では、Chris が焼いたケーキは、たとえケーキが焼かれたことすら知らなくても Pat の所有物であるという含意がある。したがって、二重目的語構文の意味を表すには、Langacker の説明の方がより適切だといえよう。しかも、この枠組みに従うと、対応する与格構文との相違も明らかにされる。

以上、見てきたように、Langacker (1990, 1991b) の説明の方がより適切であると思われるが、この場合も、二重目的語構文には主動詞で叙述される事象だけでなく、二つの目的語の間にもう一つ別の事象が表されているということが分かる。

3. 行為連鎖

さて、前節の議論で二重目的語構文には二つの事象・出来事が表されていることを見てきた。そこで、本節では、この主張をより確かなものにする証拠を見ていきたい。Langacker (1991a) は、行為連鎖 (action chain) という概念を用いて、他動性 (transitivity) と文法関係 (grammatical function) を説明しようと試みている。Langacker (1991a) によると、単一の出来事に現れる要素のどれが主語や目的語になるかということは、その出来事において生じるエネルギーの流れによって決まるという。(19)の例を見てみよう。

- (19) a. Sharon dried her hair with the blower.
 b. The blower dried her hair.
 c. Her hair dried.



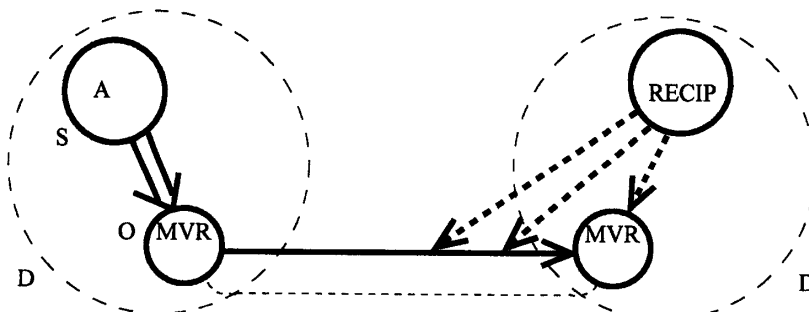
(Langacker (1991a : 332-33))

(19)の例に見られるように、主語は動作主 (agent), 道具 (instrument), 被動作主 (patient) のいずれかになる。(19a), (19b), (19c) がそれぞれ対応する例文になる。(19a) の例は (20a) に図示するように, Sharon がドライヤーという道具に働きかける行為と, その結果ドライヤーが髪に及ぼす作用, それに髪自身の内部で生じる乾燥という3つの行為連鎖がすべて顕現化されている。それに対して, (19b) は (20b) に図式化されるように, 一部に顕現化されない行為が生じ, (19c) に至っては (20c) に図示するように, 一連の行為の最終過程しか顕現化されていない。これらの分析から, 主語になる要素は全て行為連鎖の顕現化された部分の頭部 (head) であり, 目的語は同じく顕現化された行為連鎖の尾部 (tail) であるという一般化が得られる, と Langacker は主張している。言い換えると, 単一節で表される出来事は, エネルギーの流れの出発点から最終地点までを表していて, その中の顕現化された要素の頭部と尾部がそれぞれ主語と目的語になるということである。

ここで二重目的語構文で示される出来事の方に話を戻そう。(21a) は, 動詞 give が用いられるもっとも典型的な二重目的語構文の表す出来事のスキーマである。これを, 移動してくる物 (MVR = mover) を受容者 (recipient) が受け取るという出来事を表す動詞 receive の例 (21b) と比較してみる。

(21)

a. GIVE



b. RECEIVE

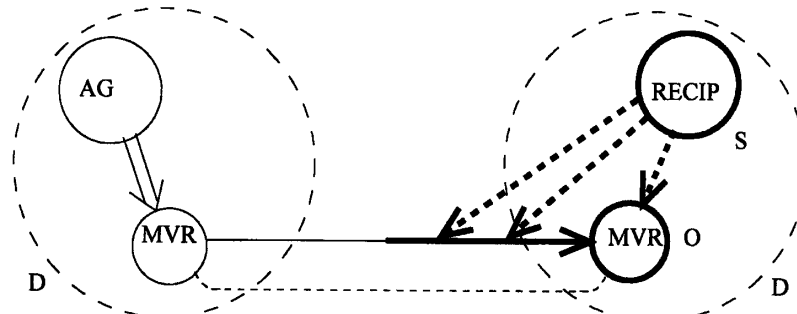


Fig. 8.1

(Langacker (1991a : 332))

(21a) では, 動作主 (A = agent) が物に働きかけ, その結果, 物は受容者の方へ移動するという動きが生じる。ここでのエネルギーの流れは動作主に始まって物で終わっている。したがって,

動作主が主語になり、移動する物が直接目的語になっているのである。一方、間接目的語として具現化される受容者はこのエネルギーの流れには含まれない。このことは(21b)のスキーマを見るとよく分かる。受容者は移動してくるものを知覚・認識し、移動してくるものに対して受け取るという動作を遂行する。この場合、RECEIVEという述語の表す出来事におけるエネルギーの発生源は受容者の方であり、受容者のエネルギーが向かう先は移動してくる物である。ここでエネルギーの流れは完了する。

ここで改めて、(21a)の二重目的語構文におけるスキーマを見てみると、エネルギーの流れは二つあることが分かる。すなわち、主語から直接目的語へのエネルギーの流れであり、もうひとつは間接目的語から直接目的語への流れである。このエネルギーの流れは、ビリヤードと同じく一方方向に伝達される非対称的な連鎖である。ところが、二重目的語構文の場合、主語から直接目的語までのエネルギーの流れだけでなく、これと対称的な方向性をもつ間接目的語から直接目的語への流れが見られる。このこともまた、二重目的語構文は単一の出来事ではなく、二つの事象が関わっていることを示唆している。

4. 二重目的語構文における事象構造と統語構造

さて、これまで見てきたように、二重目的語構文には二つの事象が関わっていることを見てきた。主語から直接目的語へエネルギーが伝達される行為連鎖をもつ出来事と、間接目的語から直接目的語へとエネルギーが伝わる行為連鎖からなる出来事の二つである。前者の場合は問題ないが、後者の事象構造はどのようなものであろうか。この問題を最後に考えてみたい。

まずは、次の例から始めよう。

(22) a. Africa's renewal of its resources

b. the map's restoration by experts

(23) a. John's book

b. Mary's nurse's uniform

(Fabb (1984 : 84))

主要部名詞が、(22)では抽象名詞、(23)では具象名詞となっている所有格名詞句構造である。Fabb (1984)によると、所有格名詞句構造におけるアポストロフィー s (以下、-s と記す) には二つの特性があるという。一つは格標識としての特性であり、もう一つは所有 (possession) の標識という特性である。-s は、(22)の例では、意味役割をもつ名詞句の格標識であり、他方、(23)では所有者を表している。⁵⁾

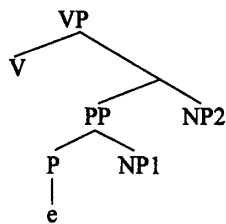
(22)のような例では、主要部名詞が派生名詞であるから、これを述語とする項が随意的に現れ、一つの事象を形成しているのは明白である。一方、(23)のような例も派生名詞のように動的な事象では

ないが、所有という事象構造をもっていると考えられる。⁶⁾文における状態動詞と非状態動詞の場合と同じように、名詞句構造においても、(22)のような例ばかりでなく、(23)のような例も事象構造をもつと考えられる。

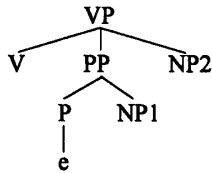
以上の議論が正しければ、二つの目的語間に成り立つ事象構造は統語構造にも反映されると考えられよう。そこで今度は、二重目的語構文の統語構造に関するこれまでの分析を概観し、その妥当性について考察していく。

第1に、空のPを設定する構造である。代表的な例は、(24a)に示す Kayne (1983a:195)の分析や、(24b)に示す Czepluch (1982)の分析である。

(24) a.



b.

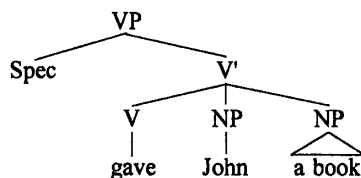


この分析は、間接目的語が対応する与格構文では前置詞句として具現化されることから、間接目的語を空のPをもつPPとして分析している。しかし、これまで見てきた二重目的語構文における事象構造の観点から見ると、これは先ほど見てきた間接目的語と直接目的語の間に生じる出来事を反映した構造とはいえない。前置詞は述語になりうるが、これは間接目的語と直接目的語の間の所有関係を表し得ない。

第2の分析は、(25)に示すような三項枝分かれ構造である。

(25) a. I gave John a book.

b.



(天野 (1998:15))

しかし、これは間接目的語と直接目的語がひとつの構成素を成していないという点と、両者の間に成り立つ出来事を反映した構造になっていないという点でやはり問題がある。⁷⁾

第4の分析は、小節 (small clause) 分析である。(cf. Hoekstra (1988), Kayne (1984)) 小節分析の一つの問題点は、(26)に示された小節内部の述語部分 XP の中の X がとりうる値が N に限定されている点である。しかし、二重目的語構文の場合には(27)に示すように名詞句しか現れない。

また、動詞によって示された出来事におけるエネルギーの流れの最終地点は、直接目的語ではなく、小節全体で表される出来事になってしまうという点も問題となろう。

(26) V [sc NP XP]

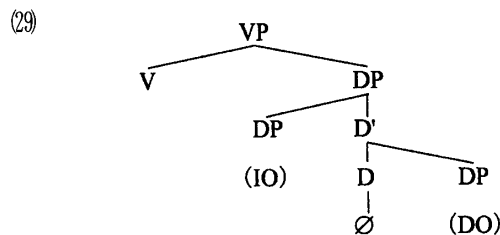
(27) V [sc NP₁ NP₂]

最後に、5番目として現在、統語論者の間でもっとも支持者の多いと思われる VP シェル仮説について触れておきたい。⁸⁾ (cf. Larson (1988, 1990), Chomsky (1995), Stroik (1996), Pesetsky (1995), Collins (1997))

(28) [_{VP} e_v [_{VP} NP₁ [_v [V t_i] NP₂]]]

この分析は、(27)の例に示したように、二つの目的語が構成素を成していなければならないという条件は満たしている。しかし、基底構造で二つの目的語の間に仮定される動詞は、表層に現れる動詞であり二つの目的語を項とする述語としてはふさわしくないし、事象構造も一つになってしまう。

以上見てきた通り、二重目的語構文の統語構造についてはいずれも問題がある。二重目的語構文の特異性は、単一節でありながら二つの事象が表されている点にある。これを正しく反映する構造として濱崎 (2003) では、次のような統語構造を提案した。



(29)の分析の利点としては、次の4点が挙げられる。第1に、二重目的語構文に特有の意味（間接目的語の直接目的語に対する所有）が反映された構造になっている。⁹⁾第2に、二つの目的語がDPという一つの構成素を成している。¹⁰⁾第3に、動詞と直接目的語の不連続性がなくなる。格付与も全体のDPに付与されたものが間接目的語・直接目的語に浸透していったものと考えることができる。第4に、ふたつのエネルギーの流れがひとつの構文で同時に示されている。

最後に、与格構文と二重目的語構文との違いについて言及しておきたい。二重目的語構文も与格構文も同じ意味構造をもつのであれば、二つの目的語を並置してある (30b) の文法性が落ちるのはおかしい。

- (30) a. I sent a walrus to Antarctica.
- b. ?I sent Antarctica a walrus.
- c. I sent the zoo a walrus.

二つの目的語が一つの構成素を成し、そこに所有格構造があるからと分析すると正しく説明できるのではないか。(30c) は二つの目的語間に所有関係が成り立つので文法的であるが、(30b) は二つの目的語間に所有関係が成り立たないので文法性が落ちるのである。二重目的語部分に所有格構

造がなければ、対応する (30a) と同様、所有の意味がなくても文法的になるはずである。

5. むすび

これまで見てきたように、Goldberg (1995) の構文文法や Langacker (1990, 1991a, 1991b) の認知文法等の研究により、二重目的語構文の意味的な特異性は Lakoff and Johnson (1980) で指摘されたものよりはるかに明らかになってきた。その特異性は、主に間接目的語と直接目的語の間に所有関係が生じることに起因する。しかし、両者いずれの分析でも二重目的語構文が二つの事象構造をもっているということまでは明言されていなかった。二重目的語構文が二つの事象構造をもっていると分析すると、二重目的語構文の意味的特異性も説明でき、より自然な統語構造の分析となる。

また、同一の項構造から成り立つように思われる与格構文と二重目的語構文が異なるのは、与格構文が単一の事象構造をもっているのに対して、二重目的語構文には二つの事象構造が関与しているためである。

注

- 1) もし間接目的語の項が担う意味役割が着点であるとする、対応する与格構文とまったく同じ項構造になり、このふたつの構文の違いがないことになってしまうので、少なくとも着点という意味役割は不適切ということになる。
- 2) この与格構文では、前置詞句が文末焦点 (end-focus) の位置にあることにも注目してほしい。
- 3) 後述する通り、Langacker は、二重目的語構文に生じる特殊な意味は二つの目的語が並置されていることによるとしている。Langacker は、認知的な枠組みに基づき形式論をとらない立場なので、二重目的語構文の統語構造がどのようなものかは明示していないが、統語的に考えると線形性 (linearity) を主張した Jackendoff (1990) と同じといえるかもしれない。
- 4) 前置詞 to は着点への到達を前提とした方向を示すのに対し、前置詞 for は途中の経路は意識されていない。次の二つの例文を比較されたい。
 - (i) We went to Rome.
 - (ii) The Turkish security forces have started searching for the missing men.
- 5) 格標識としての特性をもつ -s は、常に抽象名詞に付くとは限らない。次に示す (i) のような派生名詞 (derived nominal) の構造だけでなく、(ii) の例のように具象名詞に付く場合もある。ただし、この場合は付加詞 (adjunct) に添加されている。いわゆる絵画名詞 (picture noun) のような特殊な例もあるが、本文での議論に直接関わってくることはない、これ以上は立ち入らない。
 - (i) the city's destruction
 - (ii) yesterday's lecture

(Fabb (1984 : 84))
- 6) Taylor (1996 : 341) が指摘しているように、-s が常に所有を表しているとは限らない。たとえば、This is my car. This car is mine. というような例の場合、対応する動詞としては、have, own,

belong to だけではなく、give, take, lend, borrow, sell, buy, bequeath, inherit, lose, find などとも考えられる。

- 7) また、ここでは扱わないが Barss and Lasnik (1986), Larson (1988, 1990), Stroik (1996) で指摘されている間接目的語と直接目的語の間の非対称的階層構造を成していないという点が、統語的観点からは大きな問題となる。
- 8) これ以外にも Bowers (1993) の使役分析や、Chomsky (1981) の V' 分析等もあるが、統語的な先行分析についての包括的な批判は天野 (1998) を参照してほしい。
- 9) 主要部 D が-s 等で具現化されていないのは、二重目的語構文全体が叙述する事象（動作主から間接目的語への働きかけと、その後続く移動）の時点では所有関係という事象が生じていないからである。すなわち、機能範疇 D が示す機能は顕現 (overt) 化されていると形式上も具現化され、陰在 (covert) 化していると、具現化されていないことを示している。

これについては、(20)にあるような Bolinger (1977) が指摘している事実（補文標識 that のあるなしの意味の相違）を参照されたい。(ii)の例のように that が具現化されていると補文は先行の文脈で言及されていることを含意するが、(i)の例のように that が陰在化しているとそういう含みはなくなる。

(i) The forecast says it's going to rain.

(ii) The forecast says that it is going to rain.

(Bolinger (1977: 11))

同様に、機能範疇 D が具現化されていなければ、所有関係は生じていないことが含意される。二重目的語の部分節を分析してしまうと何らかの出来事が動的に示されてしまう。DP のように名詞類として表すとそういう動的な叙述ではなくなる。

参考文献

- 天野政千代 1998. 『英語二重目的語構文の統語構造に関する生成理論的研究』東京：英潮社。
- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and form*. London: Longman.
- Bowers, John. 1993. The syntax of predication. *Linguistic Inquiry* 24: 591–656.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Collins, Chris. 1997. *Local economy*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Czepluch, H. 1982. Case Theory and the Dative Construction. *The Linguistic Review* 2: 13–38.
- Fabb, Nigel A. J. 1984. Syntactic affixation. Doctoral dissertation. MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Goldberg, Adele E. 1995. *A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago: Chicago University Press.
- Green, Georgia M. 1974. *Semantics and syntactic regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
- Gropen, Jess, Steven Pinker, Michelle Hollander, Richard Goldberg and Ronald Wison. 1989. The learnability and acquisition of the dative alternation in English. *Language* 65, 203–257.
- 濱崎孔一郎 2003. 「二重目的語構文の統語構造と歴史的発達」Ms.
- Heine, Bernd. 1997. *Possession: Cognitive sources, forces, and grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hoekstra, Eric. 1991. On double objects in English and Dutch. In *Views on phrase structure*, ed. by Katherine Leffel and Denis Bouchard, 83–93. Dordrecht: Kluwer.
- Jackendoff, Ray. 1990. On Larson's treatment of the double object constructions. *Linguistic Inquiry* 21, 427–456.
- Kayne, Richard S. 1983a. Datives in French and English. In *Connectedness and binary branching*, ed. by Richard S. Kayne, 193–202. Dordrecht: Foris.

- Kayne, Richard S. 1984. Unambiguous paths. In *Connectedness and binary branching*, ed. by Richard S. Kayne, 129 – 163. Dordrecht: Foris.
- Kayne, Richard S. 1994. *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter..
- Langacker, Ronald W. 1991a. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume II, Descriptive application*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991b. Cognitive Grammar. In *Linguistic theory and grammatical description*, ed. by Flip G. Droste and John E. Joseph, 275 – 306. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Larson, Richard K. 1988. On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19: 335 – 91.
- Larson, Richard K. 1990. Double objects revisited: Reply to Jackendoff. *Linguistic Inquiry* 21: 589 – 632.
- Pesetsky, David. 1995. *Zero syntax: Experiencers and cascades*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Stroik, Thomas. 1996. *Minimalism, scope, and VP structure*. Thousand Oaks, California: Sage.
- Sweetser, Eve E. 1990. *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, John R. 1996. *Possessives in English: An explanation in Cognitive Grammar*. Oxford: Clarendon Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine, eds. 1991. *Approaches to grammaticalization*. Volume I. Amsterdam: John Benjamins.
- Wechsler, Stephen. 1995. *The semantic basis of argument structure*. Stanford, California: CSLI.